

神宮紙抄造再現の様子(昭和初期)  
(左端は中田製紙工場経営者の中田鹿次)

神宮紙誕生  
100年記念展

# 「絵画を支えた 究極の土佐和紙」

神宮紙に描かれた壁画を展示する聖徳記念絵画館



施設写真：聖徳記念絵画館所蔵

いまでも現役、「耐久不変」の巨大和紙。  
土佐の先人が挑んだ、究極の紙づくりに迫ります。

2024 **11/30**(土)  
～ 2025 **2/16**(日)

いの町紙の博物館 2階  
9:00～17:00

月曜日休館(月曜日が祝日の場合、翌日休館)  
年末年始12/27～1/1・1/4は休館)





なかた しがじ  
**中田 鹿次 (1872~1950)**

伊野町（当時）の中田製紙工場経営者。1900年（明治33）に同工場を創業。大正期以降、壁画用基底材に紙を採用することになり当時世界最大の手漉き紙「神宮紙」を開発した。



じんぐうし  
**神宮紙**

中田鹿次が大蔵省印刷局抄紙部さえきかつたろう長、佐伯勝太郎の指導のもと聖徳記念絵画館壁画用として開発。日本画を支える基底材を神宮紙と称した。厚手の楮紙で、平安時代の製法に従い、耐久不変の紙質を目標とした。



聖徳記念絵画館に納めた神宮壁画用紙(2.9×2.7m)

一九二四年(大正十三)、伊野で誕生した神宮紙。その特徴は、①大きさ(当時世界最大)・②耐久性・③不変性の三点が挙げられます。神宮紙に描かれた作品は今も聖徳記念絵画館の絵画を支え続けています。また、神宮紙の開発以降、絵画の支持体としての和紙の評価が高まったことも画期的でした。本展では神宮紙開発の背景やその意義、壁画事業の紹介など、ゆかりの資料の展示とともに紹介します。

せいとく  
**聖徳記念絵画館**  
(東京都新宿区)



展示室  
(聖徳記念絵画館所蔵)

明治天皇・昭憲皇太后の功績を伝えるための美術館として1926年(大正15)開館。日本画40点中35点、洋画40点中2点に神宮紙を使用。

**神宮紙誕生の現場**



現在のいの町紙の博物館が敷地の一部であった工場は、宮中で使用する「八千代紙」はじめ卓越した技術を保持。

中田製紙工場の紙漉き場  
(昭和初期)

**神宮紙誕生後の展開**

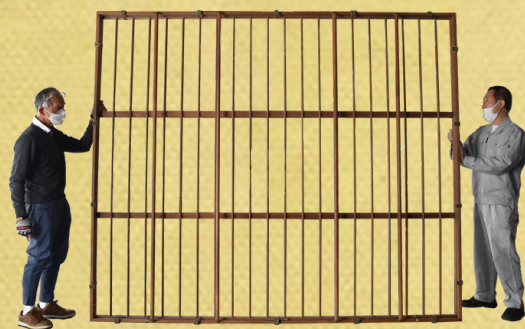


和田三造との書簡  
一九二六年(大正十五)

神宮紙の開発をきっかけに、洋画家和田三造の指導を得て洋画用キャンパス紙を開発。

**日本画用和紙の現在**

ー岩野平三郎製紙所(福井県越前市)ー  
1865年(慶応元)の創業以来150年以上、手漉きによる和紙抄造を行っており、従業員数、紙の大きさともに日本で最大の規模を誇る。2.3×3.2mの漉き舟があり、大きな日本画用紙・水墨画用紙などを作っている。



中田製紙工場  
で壁画製作用に使われていた紙漉き舟

2024 **11/30(土) ~ 2/16(日)**

いの町紙の博物館 2階

9:00~17:00

月曜日休館 (月曜日が祝日の場合、翌日休館。年末年始12/27~1/1・1/4は休館)

料金: 大人500円(400円) / 小・中・高生100円(80円)

※ ( ) は10名以上の団体料金

主催: いの町紙の博物館

協力: 明治神宮外苑 聖徳記念絵画館・佐藤志乃(公益財団法人横山大観記念館)

株式会社岩野平三郎製紙所

後援: 高知県手すき和紙協同組合・高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ

NHK高知放送局・毎日新聞高知支局・朝日新聞高知総局・読売新聞高知支局・エフエム高知

令和6年度第74回高知県芸術祭協賛行事



LINE登録で  
入館料割引あり



住所: 〒781-2103 高知県吾川郡いの町幸町110-1  
電話: 088-893-0886  
メール: tosawasi@bronze.ocn.ne.jp